

「主の日に墓前礼拝」

2014年05月19日

18日（日）の主の日、妻の両親、菊池吉弥牧師、キヨ姉ご夫妻の墓前で礼拝を捧げた。沖縄で牧師をしている妻の妹夫妻、茨城県に住むもう一人の妹と5人で墓前礼拝をした。これも、隠退したからできることであった。

菊池牧師には、言葉では言い表せないほどお世話になり、ご指導をいただいた。神学校の大学院生になった時から、菊池牧師が伝道、牧会する、上野駅前にある「下谷教会」に通った。菊池牧師は、聖書に記された出来事を目の前に描き出すように、生き生きと語られた。主イエスの福音の豊かさ、高さ、深さを感動をもって聞いた。

菊池牧師は横浜大空襲を体験し、敗戦を迎えた時、日本の罪責を深く自覚し、青森県の五所川原で開拓伝道を始めた。聖書と格闘し、豊かな福音を語る牧師になられた。また、家庭に恵まれない成育歴から、福音の喜びを肌で受け止めておられた。初めて聞く人にも分かる伝道説教家であった。全国の諸教会から伝道礼拝説教に招かれていた。日本基督教団の役職も負われ、殊に、70年代の教団紛争にも関わり、苦悩された。また、孤独の中で、苦しみ、悲しむ人の声を聞く「いのちの電話」の設立に尽力し、大きな貢献をされた。橘曙覧の「うそいふな、ものほしがるな、からだいたはるな」という言葉を書いた色紙を部屋に飾っていた。体を労わらない多忙な生活をされ、72歳の生涯を終えられた。生き方が全て、福音を語り、人の魂を牧する牧師であった。菊池牧師を思う時、パウロが記したフィリピの信徒への手紙1章20節、21節の「どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」という御言葉を思い起こす。私の聖書の読み方、教会に対する責任と愛は、不十分ながら、菊池牧師から教わったと思っている。

妻と結婚することになり、私は下谷教会の伝道師として、菊池牧師の指導を受けたいと願った。それが叶えられ、張り切っていた。ところが、うつ病になり、仕事ができなくなった。菊池牧師と下谷教会には本当にご迷惑をかけた。しかし、じっと見守ってくださった。

義母・キヨ姉はご自分を隠れて働く「花瓶の水」と言って、菊池牧師を支えておられた。上野駅で見知らぬ人から、しばしば「おっかさん」と呼びかけられたそうである。地方から上京した寂しい青年が母親に会ったような優しさが顔と体にあふれていたからである。預言者イザヤは「お前たちは、立ち帰って 静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と語っている。お義母さんはどんな時にも落ち着いて堂々としておられた。最期の時、胸の上に、ご自分で両手を組み、そのまま、天に帰られた。私はお義母さんから愛された。それなのに、何のお返しもできなかった。誠実に教会に仕えることが、ご夫妻へ感謝を表わすことであると思ってきた。私たちは主イエスの負われた十字架によって赦され、生かされている。それは、人に支えられ、人を踏み台にして、成長させられることを知ることもである。今の私があるのは、菊池牧師ご夫妻の背中に乗せられてきたお蔭である。墓前礼拝で、これらの思いがよぎり、申し訳なさと、感謝で満たされた。